

## 視能訓練士における大学教育の自己点検と評価

難波哲子\*1,2 深井小久子\*1,2 木村 久\*1,2 田淵昭雄\*1,2

## 要 約

川崎医療福祉大学（以下、医福大）は、平成3年4月に日本で初の視能訓練士（orthoptist、以下ORT）の4年制大学として設立され、平成13年4月に10周年を迎えた。また、視能訓練士法が設立されて30年になり、最近の医学・医療の進歩や少子高齢、高度情報社会の要請に応えるためには、30年前に制定されたカリキュラム内容では十分とはいえなくなった。そこで、医福大医療技術学部感覚矯正学科視能矯正専攻1～5期生を対象にアンケートによる実態調査をして、卒前教育とのつながりについて自己点検と評価を行った。発送数は126通、回収数は77通、回収率は62.6%であった。集計方法は、単純集計およびクロス集計で、一部点数化による割合算出をした。その結果、臨床に携わるORTは86.6%で、業務内容は視能矯正業務と眼科に関わる検査に重点をおく施設が多かった。ORTに関わる疾患は、多い順に屈折異常、斜視・弱視、白内障、緑内障であった。勤務先を選択する際の優先条件は、在学中は良い指導者・先輩がいることであったが、就職後は、人間関係が円滑であることに変化した。卒前教育について、在学中に学び、仕事で役立つのは基礎的および専門的な学術的知識（43%）、医療人としての態度・マナー等の情意教育（35%）であり、誇れるのは学術的知識（50%）、情意教育（30%）であった。また、医福大の専門科目、基礎科目、特色ある科目が仕事上役立っているというORTの評価が得られた。ORTは医療専門職であるため、広い学術的知識、優れた技術および豊かな人間性が必要とされる。したがって、医福大の特色である基礎医学と医療福祉に重点を置いたORT教育は、是非とも必要であり、在学中学んでおきたかった技術は、卒後の臨床経験および自己啓発によって磨かれると考えられる。点検・評価の結果は、ORTの大学教育の改善および改革に結びつけていくことが必要である。

## はじめに

川崎医療福祉大学（以下、医福大）は、21世紀の医療福祉に携わる人材の育成を目的として、平成3年4月に開学し、平成13年4月に10周年を迎えた。医福大医療技術学部感覚矯正学科視能矯正専攻では、医療専門職である視能訓練士（orthoptist：以下ORT）の育成を目的に教育を行っているが、4年制大学で行うのはわが国で初めてである<sup>1-3</sup>。ORT養成学校・養成所（以下、養成校）<sup>4</sup>は平成13年2月現在14校あるが、同年3月に1校閉校され、同年4月に新たに3校開校され、合わせて16校になる。その内訳は、大学3校、高卒3年の専門学校12校、短大卒以上の1年制の各種学校1校である。ORT養成機関の許可を受けるためには、昭和46年に制定された視能訓練士法<sup>5</sup>に基づいた視能訓練士法施行令、視能訓練士施行規則、視能訓練士学校養成所指

定規則などの規定を整備する必要がある。しかし、最近の医学・医療の進歩や少子高齢、高度情報社会の要請に応えるためには、30年前に制定されたカリキュラム内容では十分とはいえなくなった。また、資質の高い人材育成のためには教育の体制づくりが重要である<sup>6,7</sup>。ORTの現行教育カリキュラムは、厚生省の指定規則の中に時間数で教科目が規定されており、単位制を導入することが他の医療関係職種との整合性を図るために必要である。これらの諸状況を鑑みて、平成13年には、視能訓練士法に設置されている視能訓練士養成所指定規則の教育カリキュラム、内容等の見直しが行われる予定である。一方、大学教育においては、大学審議会の答申による大学改革の中で、自己点検・評価を充実させて、教育・研究の改善が求められている<sup>8,9</sup>。そこで、著者らは医福大感覚矯正学科視能矯正専攻卒業生を対象にアンケートによる実態調査をして、卒前教育と有機

\*1 川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科 \*2 川崎医科大学 眼科学教室  
(連絡先) 難波哲子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

的なつながりがあるか当学科の自己点検と評価を通じて、今後の ORT 育成について検討した。

## 対象および方法

### 1. 対象

対象は、医福大感覚矯正学科視能矯正専攻 1～5 期生134名の内、大学院生および研究生を含む、視能訓練士として勤務経験がある126名（94%）である。

方法は、平成11年12月にアンケートを郵送調査を行った。発送数126通、回収数77通、回収率62.6%である。アンケート項目は、性別、勤務地、医福大卒業後の履歴である一般的事項、勤務体制、勤務内容、就職条件、医福大の教育、卒前教育、特色ある科目、専門選択科目についての8項目41問および自由意見記入欄を設けた。質問項目を一部抜粋して資料に示す（資料）。

集計方法は、単純集計とクロス集計を行った。クロス集計は、勤務施設別に行い、勤務施設の分類は、社団法人日本視能訓練士協会白書委員会発行の視能訓練士実態調査報告書<sup>10)</sup>を参考に、大学病院、国公立病院（以下、国公立）、準公的病院（以下、準公的）、私立個人病・医院（以下、私立個人）、私立総合病院（以下、私立総合）の5つに分類した。大学病院は、国立、私立を含み、国公立病院は国立、県立などの病院である。準公的病院は日本赤十字病院や労災病院などであり、私立総合病院は中央病院などである。

また、点数化による割合算出の対象は、設問の中で多い順に5つを選択して順位をつける項目であり、1位を5点、2位を4点、3位を3点、4位を2点、5位を1点として計算した。

## 結 果

### A. 実態調査について

#### (1) 回答者数

回答者の性別は、女71名（92%）、男5名（7%）、無回答1名（1%）であった。勤務地は、都道府県別に岡山30名（39%）、広島9名（12%）、兵庫6名（8%）、香川5名（6%）、山口、愛知が各4名（5%）、宮崎3名（4%）、大阪、熊本、静岡、神奈川が各2名（3%）、東京、富山、京都、奈良、長崎が各1名（1%）、無回答3名（4%）であった。回答者数は、1期生14名、2期生15名、3期生15名、4期生12名、5期生17名、不明4名の合計77名であった。

#### (2) 勤務の体制と形態

勤務施設別に比較した回答者数の割合を示す（図1）。勤務施設別の回答者数分類は、大学病院16%、国公立10%、準公的9%、私立個人23%、私立総合

42%であった。私立病・医院に勤務する ORT は65%を占めた。職種は、視能訓練士74名、視能訓練士の資格を有し臨床教育実習および眼科でアルバイトを行う大学院生などのその他が3名であった。病院の規模と眼科チーム医療に携わる職種の設問に対しては、常勤の眼科医、ORT、看護婦および眼科診療補助の OMA（Ophthalmic Medical Assistant）がそれぞれ1～2名の配置であった。

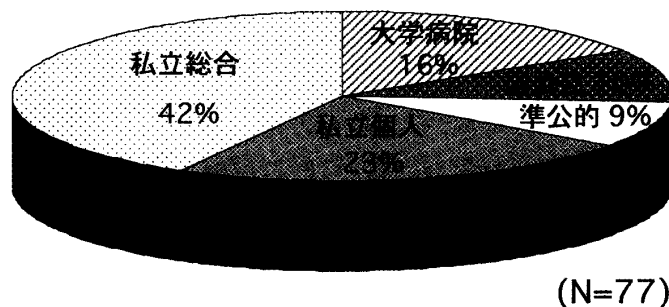


図1 勤務施設別分類

社団法人日本視能訓練士協会 白書委員会  
「視能訓練士実態調査報告書」施設分類 参照

#### (3) 勤務期間

ORTの勤務施設別の定着率を検討し、平成11年12月の時点で勤務している施設別の勤務期間を示す（図2）。医福大卒業後同一施設で勤務している人は74%であった。

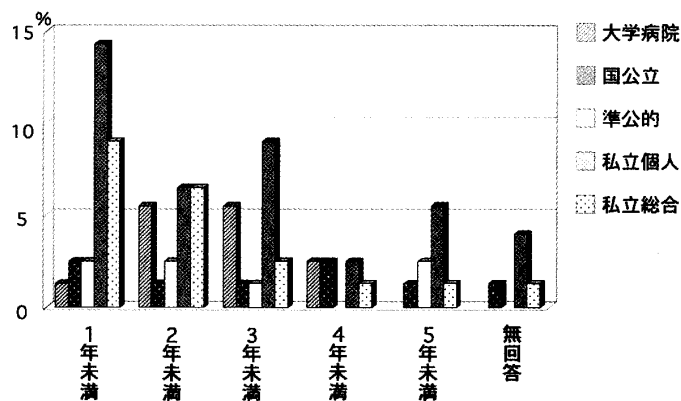


図2 勤務期間

#### (4) 勤務分野

ORTの勤務分野を臨床、教育、研究およびその他に分けて、勤務施設別に示す（図3）。臨床に携わる人は全体の86.6%であった。勤務施設区分では、臨床に携わるのは、国公立、準公的、私立総合がそれぞれ100%、大学病院が55%、私立個人が78%であった。教育に携わるのは大学病院のみで28%、研究に携わるのは大学病院17%、私立個人3%、その他は私立個人19%であった。

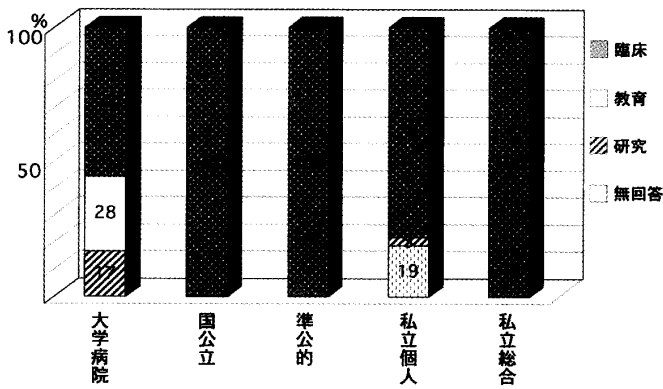


図3 勤務分野

(5) 業務内容

ORTの業務内容を視能矯正業務（両眼視機能に障害のあるものに対する機能回復訓練および検査を行う）に重点、視能矯正業務と眼科に関わる検査を同程度、眼科に関わる検査に重点をおく、眼科に関わる検査のみ、その他および無回答の6つに分類して示す（図4）。視能矯正業務に重点をおいているのは、大学病院17%、準公的14%であった。視能矯正業務と眼科に関わる検査が同程度は、大学病院59%、国公立38%、準公的29%、私立個人13%、私立総合33%であった。眼科に関わる検査に重点をおくのは、大学病院8%、国公立62%、準公的57%、私立個人74%、私立総合67%であった。眼科に関わる検査のみ行うは、私立個人13%、その他は大学病院8%であった。眼科に関わる検査業務の割合が多い理由として、「視能訓練を必要とする患者の受診率が低い」「勤務する眼科の方針である」が81%あった。

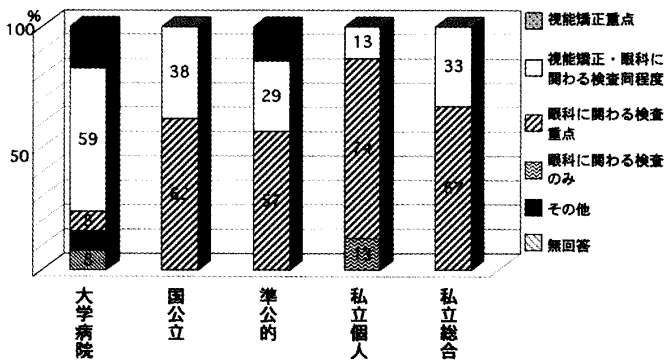


図4 業務内容

(6) 勤務施設において ORT が関わる疾患

ORTが関わる疾患は、屈折異常、斜視・弱視、白内障、緑内障、調節障害および網脈絡膜疾患であった（図5）。これらの疾患に対して、ORTが行う主な検査は、視力、屈折検査であり、斜視・弱視に対する検査は、眼位、両眼視機能検査等であった。勤務施設別の眼疾患20項目のうち外来、入院別に多い順に5項目選択し、点数化による割合算出を行った。外来の眼疾患では、大学病院で緑内障が42%、国公立、準公的、私立総合、私立個人では白内障が約30

～60%を占めた。入院の眼疾患では、すべての勤務施設で白内障が約50～80%と高率であった。

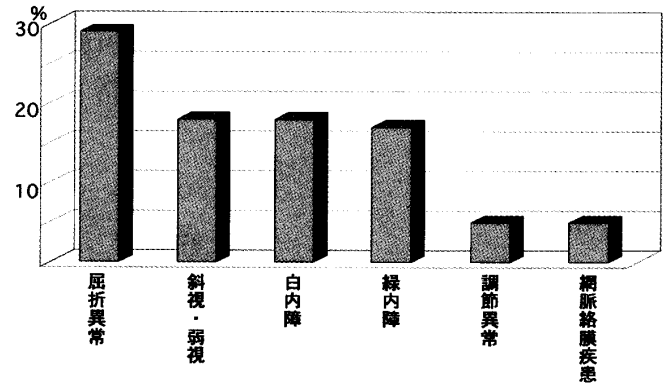


図5 ORTが関わる疾患

(7) 患者年齢層

眼科の患者で年齢層の多い順に番号をつけ、その割合を記入する設問では、患者の年齢層で多いのは、中高年齢者（50～80歳代）49%、小児（0～12歳）23%であった。

(8) 勤務条件の満足度

ORTの勤務先条件について、満足しているものと不満なものを示す（図6-A）。満足している項目では、主に「人間関係が円滑」22%、「地理・交通が便利」22%、「良い指導者・先輩がいる」16%であった。不満な項目では、「知識や技術の習得が困難」18%、「給与や待遇が悪い」17%、「施設や備品の整備が不十分」16%であった。不満な理由として、「斜視や弱視についての知識や技術を指導者から学ぶ機会が少ない」「ORTの受入態勢が整っていない」があげられた。

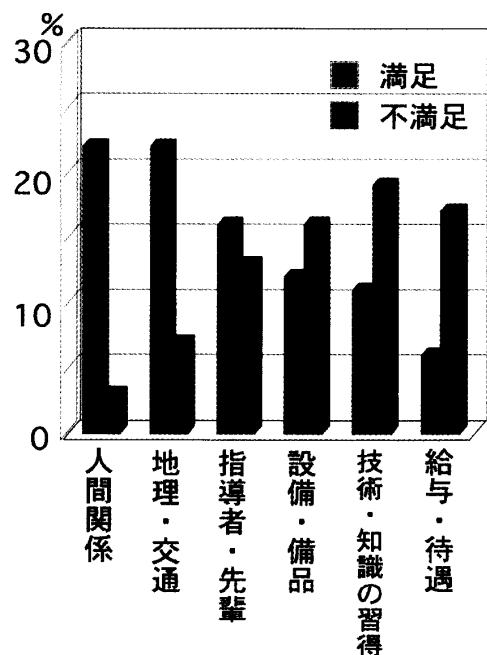


図6-A 就職条件（勤務先条件）

ORTが勤務先を選択する際の優先条件を示す（図6-B）。医福大在学中は、「良い指導者・先輩がいる」

26%で最も多かったが、就職後では、「人間関係が円滑」19%が最も多く、ついで「指導者・先輩がいる」17%、「給与・待遇が良い」16%であった。勤務先の条件として不満の強かった「知識や技術の習得が困難である」は、在学中17%、就職後では15%で比較的高い値を示した。

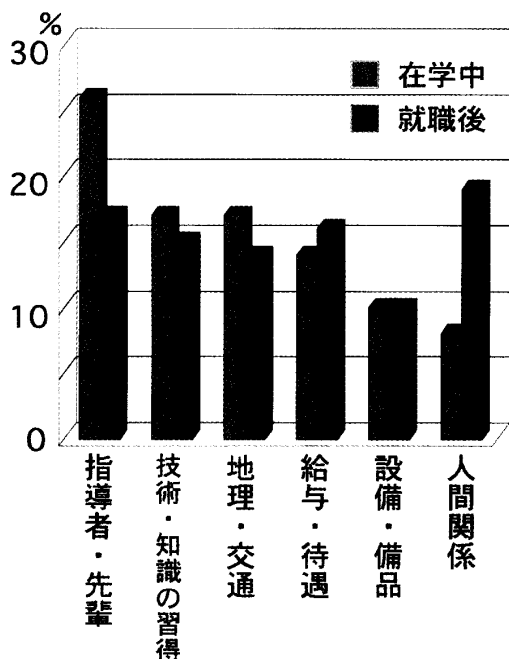


図6-B 就職条件（優先条件）

B. 卒前教育の評価

(1) 医福大受験の動機

医福大を受験した動機は、1位が「資格があると就職に有利」75%、2位が「人々の健康を守る有意義な仕事がしたい」42%、3位が「自分に向いている仕事をしたい」25%、その他、「人に勧められた」、「医療専門職に就きたかった」などであった。

(2) 卒前教育科目

ORTが在学中に学び、仕事で役立っているものを示す(図7-A)。役立っているのは、学術的知識29/68名(43%)、情意教育24/68名(35%)、技術15/68名(22%)であった。学術的知識の具体例として、「眼疾病学・視能矯正学・医学関係の基礎知識や考え方が役立つ」、技術では「仕事を行う上での能率的な行動の仕方などが習得できる」、情意教育では「言葉遣いや公的文書の書き方などが役立つ」という意見があった。

医福大を卒業したORTとして誇れるものは、学術的知識31/61名(50%)、情意教育18/61名(30%)、技術9/61名(15%)、その他3/61名(5%)であった(図7-B)。学術的知識では、電気生理や脳神経、視能矯正の基本的知識、専門用語や医学英語があげられた。また、情意教育の具体例は、目上の人に対する態度や患者に対する言葉遣い、接し方などであった。これらは、「特に医福大卒業生以外のORTと接

した時に実感する」という意見があった。

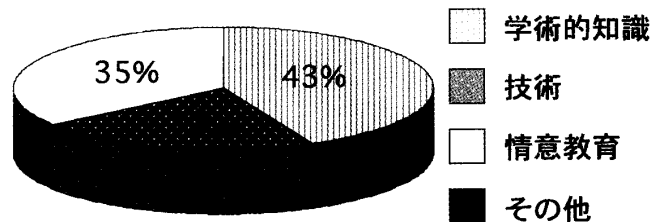


図7-A 卒前教育（仕事で役立つもの）

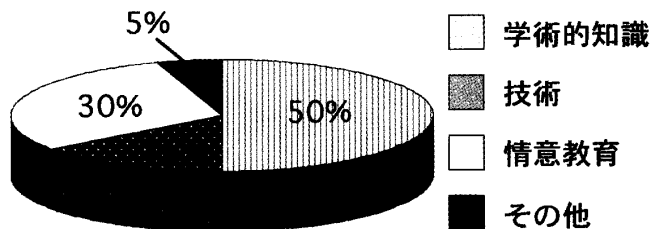


図7-B 卒前教育（誇れるもの）

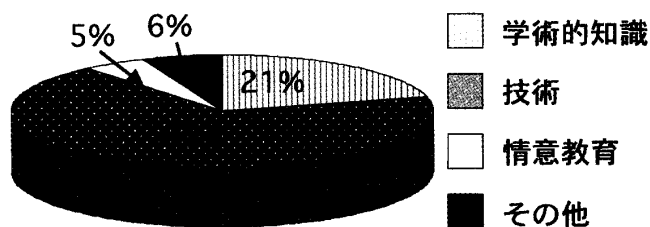


図7-C 卒前教育（学んでおきたかったもの）

在学中にもっと学んでおきたかったものは、技術42/62名(68%)、学術的知識13/62名(21%)、情意教育3/62名(5%)、その他4/62名(6%)であった(図7-C)。技術については、「病院実習の時間が少ない」という意見が最も多く、「眼科一般検査法や眼鏡・コンタクトレンズに関する技術を具体的に習得したかった」、「勤務先に視能矯正や視能訓練についての指導者いないため在学中に学んでおきたかった」というのが要望があった。

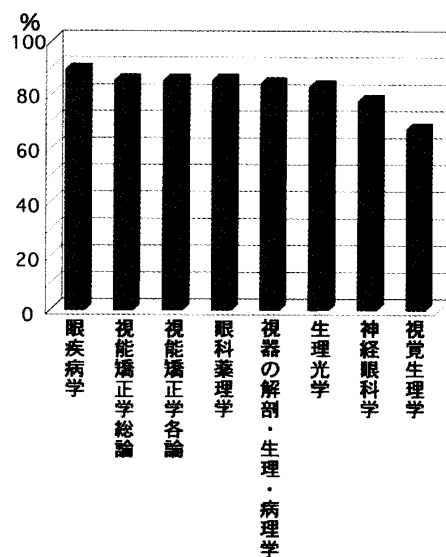


図8-A 仕事で役立つ科目名（専門科目）

### (3) 特色ある科目の評価

ORT 業務に活用されている科目は、専門科目では眼疾病学が90%で最も多く、次に視能矯正学総論、視能矯正学各論、眼科薬理学が各々86%であった(図8-A)。基礎科目では、保育学62%が最も多く、ついで小児病学43%、解剖・生理・病理学および臨床心理学40%であった(図8-B)。

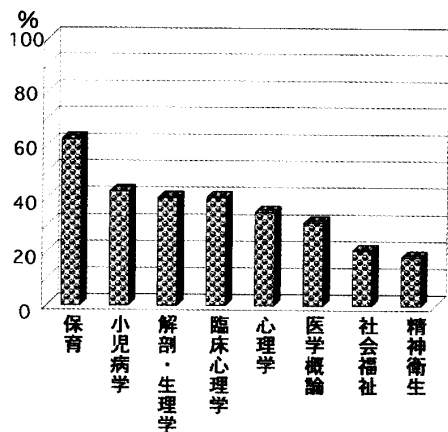


図8-B 仕事で役立つ科目名 (基礎科目)

卒前教育に追加すべき内容は、医療保険制度、老人心理、老人・障害者への接し方・介助の仕方、車椅子利用者に対する介助法、眼鏡学、介護保険、眼科に関わる全身疾患の講義などであった。

医福大で開講している特色ある科目のうち、医療人・社会人として必要と考えられる科目は、医療福祉学概論52%、生命倫理学39%、情報学概論23%であった。医療福祉学概論が必要な理由として、「ORTは医療に関係して人や病気と関わる職業であるため」という意見が多かった。情報学概論は1～4期生までは必修であったが、5期生からは選択科目になり、履修率は31.3%であった。

### (4) 4年次における視能矯正学外実習

4年次における視能矯正学外実習の期間と施設数について示す。実習期間および施設数は1期生が2施設で3週間であった、2～5期生は2施設で7週間であった。1期生の回答は、実習期間が少ない86%、適当14%であり、施設数が適当71%、少ない29%であった(図9-A)。2期生の回答は、実習期間が少ない64%、適当36%であり、施設数が適当57%、少ない43%であった(図9-B)。実習期間は、少なくとも1施設3週間が適当であり、実習施設数が少ないと答えた人の96.3%は、3～4施設が適当であり、意見として、「学外実習はいろいろな施設の勤務体制、ORTの仕事内容を知るよい機会である」があった。

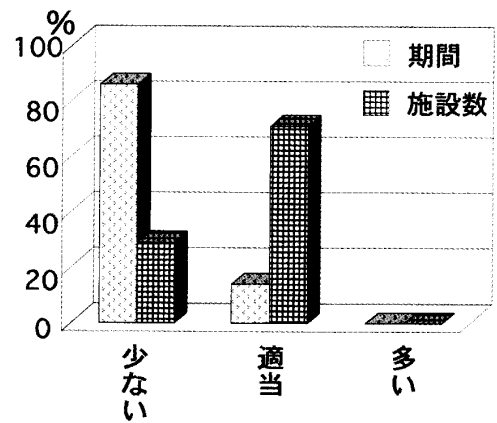


図9-A 4年次視能矯正学外実習 (1期生の回答)

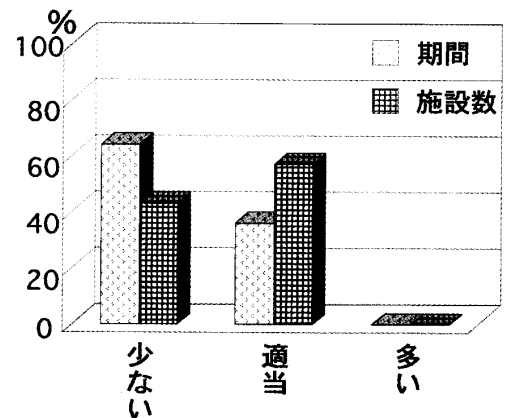


図9-B 4年次視能矯正学外実習 (2～5期生の回答)

## 考 按

医福大感覚矯正学科視能矯正専攻1～5期生の実態調査、卒前教育の評価を行い、ORT 大学教育の自己点検と評価をした。

### A. 卒業生 ORT の実態

ORT の勤務分野は、臨床に携わっている人は全体の86.6%で最も多く、教育に携わっている人は5.6%であった、この理由として、卒業生はORTとしての経験が浅く、実習施設指導者としての研修の場を得ていないのが多い。また、社団法人日本視能訓練士協会では厚生労働省基準にしたがい、実習指導者は5年以上の臨床経験を有することが必要であると規定している。したがって、1および2期生は平成13年にはORT 国家資格取得5年目を迎え、今後は実習施設等での教育指導者として、教育分野に携わるORTの増加が見込まれる。

勤務施設別の疾患は、白内障および網脈絡膜疾患が多いが、ORTに関わる疾患では、白内障(18%)および網脈絡膜疾患(5%)は比較的低かった。ORTに関わる疾患では、屈折異常(29%)が最も高い。しかし、いずれの疾患においても視力および屈折検査は眼科における診断と治療に必須の検査であり、正確な検査結果が要求されるため、ORTの専門性が高い分野である。したがって、ORTは視覚機能

の専門家として、IT（情報技術）社会でのニーズは高まるものと考えられる。

ORTの業務内容について、岩井<sup>11)</sup>は、大学病院、国公立病院、準公的病院では、「視能矯正に重点をおき、他の検査も業務範囲に入れる」が47%と最も多いと報告している。久保ら<sup>10)</sup>は、ORT協会会員919名のアンケートの結果、視能矯正業務と眼科一般検査を同程度行う43.1%、眼科一般検査に重点をおく41.3%であると報告している。村井<sup>12)</sup>は、就職1年後の業務内容について、得られた結果の信頼性が不十分なものとして、他覚的屈折検査、眼底写真撮影、蛍光眼底写真撮影など熟練を要する技術をあげている。また、最上<sup>13)</sup>はORTの大部分は、視能矯正の分野で活躍することを望んでいるが、ORTの担当する業務は、あらゆる眼科検査技術と関連が深く、一般眼科検査技術に通じておくことが望ましいと述べている。これらは時代的背景も考えられるが、ORTはリハビリテーション医療技術者<sup>5)</sup>であり、弱視、斜視など両眼視機能に障害のある者に対する矯正訓練に従事する専門技術者であることを忘れてはならない。

卒業生ORTの勤務する主な職場は、国立大学附属病院1名、国公立病院11名であった。ORTの定員化は私立大学を除いて進んでいないため、ORTの国立系施設での定員化および一部業務についての業務独占が望まれる<sup>4,11)</sup>。

## B. 卒前教育

在学中に学んだ中で最も役立っているものおよび誇りに思うものは、学術的知識であり、学んでおきたかったものは技術が多かった。技術については、眼鏡・コンタクトレンズに関する技術を具体的に習得したかったという意見が多かった。これは、ORTの大半が勤務する病・医院において屈折異常の疾患に関わるため、眼鏡・コンタクトレンズに関する技術を求める意見が多かったと考えられる。

ORT業務に活用されていない科目は、物理学、教育学、保健体育であった。また、ORT業務には必要ないが履修してよかった科目は、心理学、保育、精神衛生であった。しかし、これらの科目は、視能訓練士学校養成所指定規則に基づく指定科目<sup>5)</sup>であり、物理学はレンズや測定器械等と密接に関わり合いがあるので不必要な科目とはいえない。また、教育学は、患者に対する説明、訓練指導等に役立つが、経験年数が少なく、実践する機会がないためにこの重要性には気づいていないと考える。しかしながら、卒前教育においてこの点を考慮した教授法を再考する必要がある。

4年次視能矯正学外実習では、実習期間は1施設

3週間が適当であるという意見が多かった。また、施設数は2施設が「適当」という回答が「少ない」よりも多かったため、学外実習は少なくとも2施設7週間の実習が望ましいと考えられる。ORT養成における臨床実習期間について、久保ら<sup>10)</sup>は、充分34.7%、やや不足36.8%とし、卒前教育で追加するものとして理論よりも実技的分野が多いと述べている。技術不足については、医福大卒業のORTについても同様の結果であった。在学中に学んでおきたかったものとして技術が多かったのは、4年次における視能矯正学外実習の不足と関連があると思われる。したがって、4年次における実習期間および施設数の増加により技術の向上が望めると考えられる。

医福大の特色ある科目の医療福祉学概論は、医療人・社会人として将来必要であるという意見が多く、卒前教育として専門知識や技術のみでなく、医療・福祉に関する知識の充実も求められている。

丸尾<sup>14)</sup>はORTは医療従事者として、知識、技術、心構えの三つの事項が要請され、患者への態度・対応といった心の面が大切であると述べている。また、市田<sup>15,16)</sup>はORT教育は、卒前・卒後を通じて知識・技術偏重の傾向にあるが、教育内容について徳育に重点をおいた、全人教育的要素の導入が必要であると述べており、広い知識と優れた技術とマナーを有するORTの養成が必要とされている。

医福大は、日本における最初のORTの大学教育として、特色ある科目の開講と教育課程を編成して開学した。教育カリキュラムの特徴は、基礎医学に重点をおき、視能矯正実習教育には、卒後即実践力を必要とする社会ニーズに応えるORTの養成をめざした<sup>6)</sup>。医福大では、視能矯正学実習の独自の方法として、ロールプレイ、シミュレーション、学術展示による実習を行っている<sup>17,18)</sup>。特に、ロールプレイは、問題発見と問題解決能力を育成するための方法として効果的であり、卒業生ORTの評価が高かった。

今回、医福大卒業のORTを対象にアンケート調査を行い、卒業生の実態および卒前教育について把握することができた。今後、医福大卒業のORTが勤務する施設の医療職者および他のORT養成校卒業生を対象に外部評価を行い、比較・検討することが必要であると考えられる。

## 結 論

平成13年は、医福大開学10周年、視能訓練士法制定後満30年であり、1つの区切りの年である。視能訓練士法は、昭和46年に弱視、斜視のリハビリテーション職種として法制化され、現在に至っている。

日本の医学・眼科医療の進歩にともなった ORT 教育を大学で実践するために、医福大1～5期生を対象に ORT の実態調査をして、卒前教育がどのように生かされ、関連づけられているかを検討した。その結果、大学における ORT 教育の自己点検と評価は、将来指導的立場にたつ人材の育成および即実践力を必要とする社会的要請に応える教育が行われていたが、改善すべき点も明らかになった。高い評価が得られた点は尊重して、批判された点については改善の努力が必要である。したがって、自己点検・評

価を常時行い、その評価結果を ORT 教育カリキュラムの見直しおよび大学教育の改善や改革に結びつけていくことが重要であると考えられる。

本研究を実施するにあたり、協力をいただいた川崎医療福祉大学医療技術学部感覚矯正学科視能矯正専攻難波ゼミの7期生(97年度生)提嶋真理さん、南江梨子さんに深く感謝いたします。また、本研究のアンケートに御協力いただきました卒業生の皆様に厚くお礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 筒井 純(1990) 視能訓練士の大学教育の理念. 日本眼科紀要, **41**(10), 2039-2041.
- 2) 深井小久子, 筒井 純(1991) 視能訓練士の大学教育構想. 日本視能訓練士協会誌, **19**, 160-163.
- 3) 筒井 純, 深井小久子, 早川友恵, 椎原久美子(1992) 視能訓練士教育カリキュラムの改革について. 眼科臨床医報, **86**(5), 183-187.
- 4) 田淵昭雄(1998) 視能訓練士学校における教育の実際. あたらしい眼科, **15**(6), メディカル葵出版, 東京, pp789-797.
- 5) 厚生省健康政策局(2000) 視能訓練士学校養成所指定規則. 健康政策法(平成12年度版), 中央法規, 東京, pp1204-1240.
- 6) 深井小久子, 早川友恵, 田淵昭雄(1997) 視能訓練士の大学院教育構想—視能矯正・訓練学の学問体系と展開—, 眼科臨床医報, **91**(8), 87-89.
- 7) 深井小久子(1997) 視能訓練士の大学院教育構想—教員養成—これからの展開—. 日本視能訓練士協会誌, **25**, 195-200.
- 8) 文部省高等教育局(1994) 組織運営部会における審議の概要(報告)—大学運営の円滑化について—. 大学資料, **123**, 17-32.
- 9) 大学審議会(1998) 21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—(中間まとめ). 98-104.
- 10) 久保喜美, 池淵純子, 川瀬芳克(1995) 視能訓練士白書作成のためのアンケート. 視能訓練士実態調査報告書, 21-28.
- 11) 岩井壽子(1982) 視能訓練士の定員化とその業務. 日本視能訓練士協会誌, **10**(2), 43-47.
- 12) 村井保一, 岩井壽子, 平井京子, 西尾路子(1979) 国立大阪病院附属視能訓練学院における教育の問題点について. 日本眼科紀要, **30**(2), 206-217.
- 13) 最上齊子(1976) 国立小児病院附属視能訓練学院卒業生の現況. 日本の眼科, **47**, 701-709.
- 14) 丸尾敏夫(1989) 視能訓練士の教育について. 日本視能訓練士協会誌, **17**, 52-54.
- 15) 市田忠栄子(1987) 視能矯正と視能訓練士のあり方. 眼科 Mook No.31 視能矯正, 金原出版株式会社, 東京, pp1-9.
- 16) 市田忠栄子(1989) 視能訓練士養成の現状と問題点(卒前教育). 日本視能訓練士協会誌, **17**, 30-36.
- 17) 深井小久子, 早川友恵, 難波哲子, 椎原久美子, 新井紀子, 岡本料子(1994) チェックリストによる実習教育の評価. 眼科臨床医報. **88**(6), 929-932.
- 18) NAMBA T, FUKAI S (1998) New Educational Programs for Orthoptic Students. *Kawasaki Journal of Medical Welfare*, **4**(2), 97-103.

(平成13年6月7日受理)

## 資料 卒業生実態調査アンケート（抜粋）

○現在、主な職場は以下のどれですか。1つ選び○をつけて下さい。

1. 国立大学付属病院
2. 国立病院
3. 公立大学付属病院
4. 公立病院
5. 赤十字病院
6. 私立大学付属病院
7. 企業病院眼科
8. 個人経営眼科
9. その他

○あなたは現在、どのような分野で働いていますか。（複数回答可）

1. 病院・施設などで臨床活動をしている。
2. 視能訓練士養成校で教育に携わっている。
3. 研究機関で研究をしている。
4. その他

○現在あなたが従事している業務はどんな内容ですか。最も当てはまる番号に○をつけて下さい。

1. 視能矯正に関する業務のみ行う。
2. 視能矯正に重点があるが、眼科一般検査も行う。
3. 眼科一般検査及び視能矯正に関する検査を同程度に行う。
4. 視能矯正よりも眼科一般検査を主として行う。
5. 眼科一般検査のみ行う。
6. その他

○あなたの勤務する眼科が扱う疾患を下のA群から、多い順に5つ選び、〈 〉にアルファベットで記入して下さい。入院施設のあるところは、入院患者についても記入して下さい。

○あなたの勤務する眼科で、ORTが扱う疾患を下のA群から多い順に5つ選び、【 】にアルファベットで記入して下さい。また、主に用いる検査法（複数回答可）を下のB群から選び、〈 〉にアルファベットで記入して下さい。

A 群	a. 屈折異常	b. 調節異常	c. 弱視	d. 斜視
	e. 眼筋麻痺	f. 眼振	g. 瞳孔異常	h. 眼瞼疾患
	i. 結膜疾患	j. 涙器疾患	k. 角膜疾患	l. 強膜・ぶどう膜炎
	m. 眼外傷	n. 網膜脈絡膜疾患	o. 硝子体疾患	p. 白内障
	q. 緑内障	r. 視神経疾患	s. 視路疾患	t. 眼窩疾患
	u. その他			

B 群	a. 視力	b. 屈折	c. 調節	d. 眼鏡
	e. CL	f. 光覚	g. 色覚	h. 視野
	i. 眼圧	j. 隅角	k. 眼位	l. 眼球運動
	m. 輻湊	n. 両眼視機能	o. 前眼部一般	p. 涙液・涙道
	q. 細隙灯顕微鏡	r. 瞳孔	s. 眼底	t. 眼写真術
	u. 電気生理	v. 超音波診断	w. 放射線診断	x. 微生物・免疫
	y. 斜視訓練	z. 弱視訓練	z1. 問診	z2. その他

○現在の勤務先の条件についてお聞きします。

満足されているものは何ですか。（複数回答3つまで可）

不満なものは何ですか。（複数回答3つまで可）

a. 地理・交通に便利	b. 給与や待遇が良い	c. 福利厚生が良い
d. 施設や備品が整備されている	e. 技術や知識を習得できる	f. 教育・研究体制が良い
g. 良い指導者・先輩がいる	h. 来院患者の傾向	i. 人間関係が円滑
j. 人に勧められた	k. その他	



## 資料 卒業生実態調査アンケート（抜粋）

- 在学時に学び、最も仕事で役立っているものは何ですか。番号を選び、具体的な内容を記入して下さい。
1. 学術的知識 2. 技術 3. 情意教育（態度・マナーなど） 4. その他
- 在学時に学んでおきたかったことは何ですか。番号を選び、具体的な内容を記入して下さい。
1. 学術的知識 2. 技術 3. 情意教育（態度・マナーなど） 4. その他
- 医福大を卒業したORTとして最も誇れること何ですか。番号を選び、具体的な内容を記入して下さい。
1. 学術的知識 2. 技術 3. 情意教育（態度・マナーなど） 4. その他

視能訓練士法の規定に基づく厚生大臣の指定する教育科目には以下のものがあります。

基礎科目	a. 教育学	b. 倫理学	c. 心理学	d. 保健体育
	e. 社会福祉	f. 精神衛生	g. 小児病学	h. 数学・統計学
	i. 外国語	j. 関係法規	k. 医学概論	l. 解剖・生理学
	m. 保育	n. 公衆衛生概論	o. 臨床心理学	p. 物理学
	q. 生物学			

専門科目	r. 視器の解剖・生理・病理学	s. 視覚生理学	t. 生理光学
	u. 眼疾病学	v. 眼科薬理学	w. 神経眼科学
	x. 視能矯正学総論	y. 視能矯正学各論	

- ORTの業務に大いに活用されている科目があれば、アルファベットですべて記入して下さい。
- ORTの業務にあまり活用されていないと思う科目があれば、アルファベットですべて記入して下さい。
- ORTの業務には必ずしも必要ではないが履修して良かったと思う科目があれば、アルファベットですべて記入して下さい。その理由も記入して下さい。
- 実習Ⅲ（4年次）での学外病院実習の時間数についてどう思いますか。当てはまるものに○を付け、適当だと思ふ時間数を記入して下さい。その理由も記入して下さい。
- （ ） 少ない                      （ ） 適当                      （ ） 多い
- 実習Ⅲ（4年次）の学外病院実習で一人が実習する施設数についてどう思いますか。当てはまるものに○を付けて下さい。
- （ ） 少ない                      （ ） 適当                      （ ） 多い

医福大で開講している特色ある科目には以下の科目があります。

a. 医療福祉学概論	b. 生命倫理学	c. 文化人類学	d. 情報学概論
------------	----------	----------	----------

- 医療人・社会人として将来必要だと思う科目をアルファベットですべて記入して下さい。その理由も記入して下さい。
- 卒前教育としては必ずしも必要ではないと思う科目があれば、アルファベットですべて記入して下さい。

## Self-examination and Evaluation of Kawasaki University's Education for Orthoptists

Tetsuko NAMBA, Sakuko FUKAI, Hisashi KIMURA and Akio TABUCHI

(Accepted Jun. 7, 2001)

Key words : ORTHOPTIST, UNIVERSITY EDUCATION, SELF-EXAMINATION, EVALUATION, QUESTIONNAIRE SURVEY

### Abstract

As a part of the 10th anniversary of the existence of Kawasaki University of Medical Welfare, established as a 4-year college in April, 1991 to foster orthoptists (ORT) for the first time in Japan, a fact-finding research was conducted to determine whether the education acquired at this school meets the requirements of contemporary medicine, advances in medical science, a low birth rate/aging society, and the IT (Information Technology) society. Questionnaires were distributed to 126 students of the first to fifth graduating classes of the Orthoptist Course, the Department of Sensory Sciences, Faculty of Medical Professions seventy seven (62.6%) responded. The results revealed that 86.6% of the graduates worked in a clinical field, mainly concerned with orthoptics and ophthalmologic examinations. Diseases managed by ORT included refractive errors, strabismus, amblyopia, cataract, and glaucoma, in that order of frequency. Educational content given soon before graduation was evaluated as "useful for works" by 43% and "a pride" by 50%, whereas 68% felt a lack of skill. Because of specialization in medical science, every ORT is required to have a wide range of academic knowledge, skill techniques, and human compassion. The results of the present questionnaire survey give a clue to the betterment and evolution of the university education for ORT.

Correspondence to : Tetsuko NAMBA

Department of Sensory Sciences, Faculty of Medical Professions  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan  
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.11, No.1, 2001 107-116)